

9) ナシ=梨

ナシはバラ科ナシ属の落葉高木で4月ごろ白い5弁花を無数につける。中国からヨーロッパ、日本にも分布し、日本で栽培される種は『ヤマナシ』を改良したもので『ニホンナシ』として『チュウゴクナシ』『セイヨウナシ』と区別している。西洋ナシには赤花をつけるものもあり、花を見るだけでも情緒があつていい。しかし花は花序の中心部分から開花して4~5日で慌しく散ってしまう。学名は『*Pyrus pyrifolia*』で、属名はナシの木の古典名、種小辞は「ナシのような葉の」という意味である。

梨は有史以前の遺跡から、炭化した種子が発見されており、人間との長い歴史を刻んできた。ギリシャの詩人ホメロスは、梨は神の贈り物として栽培されていたことを記し、ローマ時代になると品種も次第に増えて、栽培地もヨーロッパ中部へと広がった。一方、中国ではすでに『詩経』の時代に梨栽培が行なわれており、2500年以上の歴史を持っている。その後の文献である『史記』(シキ)や、『三秦記』(サンシンキ)、『花鏡』(カキョウ)などの書物にも紅梨(ホンリー)、白梨(パイリー)などの名が見える。東北地方では寒冷地に対応する品種も開発され、黄河の流域では『慈梨』(ツリー)『秋白梨』(シュウパイリー)などが栽培されるようになった。また唐の玄宗皇帝は音曲や戯曲を好み、長安の『禁苑』を開放して梨が植えられているところに俳優の養成所を作り、300人の子弟を自ら教えたと『唐書』(トウジョ)には記されている。この故事が「梨園」の呼称となり、日本でも歌舞伎役者の社会をそう呼んでいる。平安時代になると内裏の『昭陽舎』(ショウヨウシャ)は梨を植えていたため『梨壺』(ナシツボ)と呼ばれるようになり、梨壺の五歌仙として泉式部(イズミシキブ)、赤染衛門(アカゾメエモン)、紫式部(ムラサキシキブ)、馬内侍(ウマノナイシ)、それに伊勢大輔(イセノタユウ)がその名を馳せた。

日本でもナシ栽培の歴史は大変に古く、持統天皇(686~697年)の時代にクワ、クリなどとともにナシの栽培が奨励されたことが『日本書紀』に記されている。また西暦908年の『三代実録』には信濃の国からナシが、『延喜式』には甲斐の国からは青梨子が献上されたことが記されており、当時すでにならかなり栽培されていたことが想像される。しかし梨の栽培が盛んになったのは江戸時代のことで、この頃になると品種も増えて産地も広がる。新潟県の月潟村には幹回り2mにも達するものもあり、江戸時代からの栽培法である『棚作り』手法を今日によく伝えている。

ゲルマン人は梨の木を神聖な木として崇拝しており、女兒が誕生するとこの木を植える習慣がある。ところがこの梨はキリスト教布教の下、異教徒の信仰を根絶するという考えから、宣教師たちによって切り倒されてしまった。しかし子供が生まれると果樹を植えるドイツ人の習慣は今でも変わることなく続いている。お産するときにも後産を梨の木の下に埋めると、次は女の子が生まれると信じられており、梨がよく実った翌年は女の子が多いといわれている。またイギリスでは13世紀には経済栽培が

行なわれ、品種改良も進んだ。1796年頃にイギリスで偶然に実生から生まれた『ウィリアムス・ボン・クレッシェン』(Williams Bon Chretien)という種は、アメリカでは『バートレット』(Bartlett)と呼ばれ、今日も洋梨の主力となっている。またフランスでは同じ頃に『ラ・フランス』(La France)と言う品種が生まれ、こうした品種は今でも栽培され、日本でも前者は新潟県で後者は山形県で栽培されている。

さて梨の花は漢詩の世界では幾度となく取り上げられたてきたが、中でも有名なのは、白楽天(772~846年)の『長恨歌』の一節である。

玉容寂寞淚闌干 玉容は寂寞として、淚闌干

梨花一枝春帶雨 梨花一枝、春雨を帯ぶ

この意味は「美しい顔は物悲しく、とめどなく涙を流している。／その様子は梨の花が一枝、春の雨に打たれているようだ。」ということから、梨の花は美人が思い悩み、悲しむ姿を形容するものとなり、転じて静かな様をいうようにもなった。

ところが10世紀末には清少納言は『枕草子』の「木の花は」(34段)の中で、

梨花の花世にすさまじきものにして近うもてなさず、はかなき文つけなどだにせず、愛敬(アゲヨウ)をくれたる人の顔などを見ては、たとひにいふも、げに、葉の色よりはじめてあいなく見ゆるを、...

といてナシの花を自分の好みとは違うといいながら、

梨花一枝、春、雨を帯びたりなどといひたるは、臆気ならじと思ふに猶いみじうめでたきことはたぐひあらじと覺へたり。

と、長恨歌の一説を引用してナシの花も結構な花だといっている。この時代、中国から渡ってきたものは、物であろうと精神であろうと、文学であろうと、すべてがピッカピカの舶来品だったのだ。松尾芭蕉も『奥の細道』で「国破れて山河あり、城春にして草青みたり」といって杜甫の『春望』を引用している。こうした日本人の舶来好みは、現在にいたるまで綿々と続いている。古代より全てのものを中国から取り入れることで、用が足りてしまった日本人にとって、新しいものを造り出すよりも、中国をまねる方がずっと確かだったのだろう。日本人の文化は外国文化をマネルことからスタートしたと言っても過言ではない。このため日本ではマナブという言葉は、マネルという言葉と同一であり、このことは日本人の著作権意識などの分野で極めて曖昧な点や、とかく創造力が乏しいという点などにも現れている。

ところで『梨』は『無し』に通じるために、日本では邸内に植えることを避けたがる傾向があった。また妊婦には腹が冷えるからという理由で、ナシを食べることを禁じているところも多い。これはナシという言葉からくる、流産のイメージを払拭せんとするものであろう。平安時代にはすでに反対語の『アリ』を用いていた。しかしこの反対語を用いる例は他にも結構多い。『アシ』という植物があるが、これは「悪し」ではまずいので「良し」といわれるようになった。結婚式などの席でも宴会を終わる

とき『御被良喜』などというのもこの類の言葉であろう。どうやら日本人は言語というものに対して、融通のきく鷹揚な民族であつたらしい。外国のものを真似るには、あまり厳格なものは不都合だったのかもしれない。しかし中国語も日本語に劣らず結構おおらかで造語能力に優れている。たとえば音が同一だと、とかく他の文字に置き換える習慣がある。たとえば『逾月』(ユゲツ)という言葉があるが、これは月を超えること、つまり翌月を意味する。またこれは『踰月』とも記す。『逾』も『踰』も同じく超えるという意味であるから問題もないのだが、これを『音通』と称している。ところがこの『ユ』という文字は、他にも『愉』『愈』『癒』『諭』『輸』『兪』『愉』『揄』『揄』『渝』『瑜』『瘉』『覬』『覘』など14文字以上もあって、中国人は漢字の偏とつくりを組合せることによって無数の文字を生み出してきた。このことは表現の可能性を広げることに役立ったが、同音異語が極めて多くなるという厄介な問題も引き起こした。これは日本語の場合も似たり寄ったりである。スポーツ紙や新聞の広告コピーなどを見てもすぐにわかる。『お買い得』はしばしば『お買い徳』になってしまうし、『横綱への夢綱ぐ』という風に同じ音の文字を用いて、新たな表現をしようと試みるのである。そのうえ音が似ていたりすると、すぐに悪乗りしたがる。アメリカの第42代大統領ビル・クリントンは、たちまちクリキントン大統領になるし、不倫をしたことが公になるとフリントン大統領になってしまうという具合である。小浜市のオバマ大統領びいきも同類であろう。しかしこうした言語の持つ造語能力は、しばしばその国の経済の発展や哲学の進化に役立つ。事実イギリスで言語が乱れた、つまり造語能力が高まったのは、ハノーヴァー王朝のヴィクトリア女王(1837～1901年)の頃といわれている。またドイツでは普墺戦争(1866.6～7)、普仏戦争(1870.7～1871.5)に勝利した鉄血宰相ビスマルク(1862.9～1890.3 執政)の時代である。当時の歴史年表を紐解いてみると、確かに両国が最高潮に達した時期で、芸術の分野にとどまることなく科学技術の分野でも新しい発見や開発がなされた時代であった。人間の歴史はとかく「初めに言葉ありき」なのである。物を考えたり論理を追求したりするのは、言語以外の手段ではできない。言葉が与えられて初めて人間は、物なり人なりのイメージを確定することができる。一つの概念が定まって始めて、社会で共有することができる。だからこそ新しい商品が生まれるときも、確たるネーミングが必要なのである。こうした日本人の造語能力の巧みさは、明治時代の外来語の日本語化によって最高潮に達し、そのパワーは今も続いている。三軒茶屋を「サンチャ」、六本木を「ポンギ」などというのは、善し悪しは別として街の若々しい活気をうまく捉えている。有史以来2,000年もの長きにわたって、外来語を取り込んできた日本人にとって、巧みな造語により新しい概念を定着させることは、国家の繁栄の基だったのかも知れない。

さてナシの苗には一才ものはナシ。『幸水』『新高』などの他は西洋ナシだが、西洋ナシは素人には育てられない。苗木の入手はインターネットが一番早い。



白が美しいナシの花だが……。散るのもすこぶる早い(埼玉県東松山市)。



ナシの花、ここは信州の安曇野である。山に囲まれた平坦なエリアがかなり続く。そこには農家が点在し、ナシ、リンゴ、サクラなどの果樹や花が咲き乱れる(長野県松本市)。



埼玉県はナシの産地が多い。宮代町和戸の周辺は特に産地としても有名である(埼玉県宮代町)。



農家の庭先で咲いていたナシの花、付近には人も居らず静まり返っている(山梨県北杜市)。



ヤマナシの花。ヤマナシはいわばナシの原型である。本州、四国、九州に自生するが、古い時代に中国から帰化したとの説もある。学名は『*Pyrus pyrifolia*』である(長野県蓼科高原)。



ナシの果実(埼玉県杉戸町)。この辺りはナシの産地として栄えてきたが、現在では人口 5 万人に近いベッドタウンである。今では住宅に囲まれ、ナシ畑の方が遠慮がちである。



熟してきたナシ。現在では「幸水」「豊水」「二十世紀」「新高」などが栽培されている。

[目次に戻る](#)